

12 コミュニティ・ミュージアム・オーナー・プロジェクト (CMOP)

活動のテーマ：CMOPの推進

活動の特徴

空き家や廃校をその場で活用したアートによる地域活性化



活動対象地域 新潟県十日町市、津南町

団体のミッション

大地の芸術祭と連動しながら、アーティストや建築家の参画による改修と建物の維持管理費用を担うオーナーの発掘によって地域の空き家・廃校を再生・活用する。

この団体とは・・・

新潟県妻有地域の空き家や廃校を活用してアートによる地域活性化をめざすアートディレクター、建築家たち

キーワード

地域ストックの活用
アートを媒介とした地域づくり



事業化の背景

経済的に自立した活動を目指すため、大地の芸術祭で実施した空き家・廃校の再生・活用の規模拡大を目指す。

活動内容

- ・ 空き家の調査・情報収集、改修
- ・ オーナーの募集、物件販売、命名権の販売
- ・ 空き家を活用したアート作品の公開
- ・ 空き家を売買する組織（有限会社）の設立
- ・ 空き家、廃校の日常的な活用
- ・ 空き家売買のコーディネートを行う組織（NPO）の設立

収入費目

命名権販売 空き家販売 施設宿泊料・使用料入場料 アート制作費

団体設立時期	1998年7月
代表者	北川 フラム
連絡担当者	関口 正洋
連絡先 住所	〒942-1526 新潟県十日町市松代 3816-1 まつだいふるさと会館3階 特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構
電話	025-595-6310
FAX	025-595-6311
E-Mail	tsumari@artfront.co.jp
ホームページ	http://www.echigo-tsumari.jp

1. 団体の設立経緯と目的

1) 地域や社会の状況・課題・ニーズ

越後妻有は十日町市・津南町からなるエリアで、新潟県南部に位置し、中山間地域ゆへの耕作条件と日本有数の豪雪地帯という気象条件があいまって、若年層の流失、過疎と高齢化によって地域の活力が減退している。こうしたなか、1996年以来、新潟県の推進する「ニューにいがた里創プラン」の指定地域として、美しい里山に現代アートを媒介に10年をかけて地域再生の礎を築くことを目標とした「越後妻有アートネックレス整備事業」に取り組んできた。

越後妻有アートネックレス整備事業の中心事業である「越後妻有アートトリエンナーレ大地の芸術祭」は、三年毎に開催される現代アートの祭典で、760平方キロメートルに点在する現代アート作品を道しるべに里山を巡り、地域を知ってもらおうという新しい「観光・旅」として注目を集め、アートを媒介に地域・世代・ジャンルを超えた人々の交流や協働は、過疎地域の地域活性化の新しい先導モデルとして「第5回ふるさとイベント大賞」を受賞するなど高い評価をうけた。

こうしたなか交流人口の増加や地域のファンや応援団が生まれているものの、中越大震災や度重なる豪雪で人口の減少は続いており、高齢者の割合が高い集落も数多くある。約200あるといわれている集落のうち、40以上が限界集落（人口の50%以上が65歳以上で、冠婚葬祭などの社会的共同生活の維持が困難な集落）といわれている。

高齢者の一人暮らし世帯も多く、親類の所へ移ってしまったりするケースが多い。結果として、使われなくなった空き家が増えていく現状がある。残したいという家主の意向、壊すにも費用がかかるといった理由で増えていく空き家は、持ち主はもちろん、周辺地域



大地の芸術祭では地域の全土が作品の舞台になる

の方たちを含めても利用展開の方法がないのが現状である。

2) 活動のきっかけ・目的

大地の芸術祭は、地域に昔からあるもの、技術、人を活かし、マイナスとされているものをプラスに変えるという方針のもと、地域活性化を目的として10年をかけて地域と関わってきた。この取り組みの過程で、地域の景観・暮らし・現状をみせるため作品を、棚田・里山、さらには民家・廃校に配置してきた。集落内に入り協働をする中で、少しずつ個人のスペースとなる家に関われるようになり、家に関わるプロジェクトを進めていこうとしていたさなか、2004年10月23日に中越大震災が起こり、越後妻有地域も甚大な被害を受けた。それにより、住み慣れた家を出ざるを得ない人たちが増え、空き家増加の速度が速まった。

越後妻有地域もほかの過疎地域と同様で、人、土地、コミュニティ、誇りの空洞化が起こっており、「住民の寄り合い所がない」、「人がいなくてさびしい」という状況が浮かび上がってきた。これらのコミュニティの拠り所として、内外の住民が会おう場所として空き家を活用することが考えられた。しかし、これらを維持するためには、費用もかかり管理体制も必要なことから、オーナー、スポンサーが必要となってくる。

また、一般的な庶民住宅は里山の風景を作ってきた一因であり、半年の冬の生活を営むために設えられていたり生活文化が集まっている器である。長らく営まれてきた棚田をまもることと同様に、家を守っていくことも、集落・地域を守っていくことにつながる。



越後妻有地域

コミュニティ・ミュージアム・オーナー・プロジェクト（以下CMOP）はこのような経緯から、空き家を残していこうとして、想起されたプロジェクトである。

2. これまでの実績

1996年：

新潟県ニューにいがた里創プランの一環で「越後妻有アートネットワーク整備構想」がまとまる。

1998年～1999年：

妻有の自然、文化に隠された魅力を再発見するための写真と言葉のコンテスト「越後妻有8万人のステキ発見」を開催

1999年冬：大地の芸術祭サポーター「こへび隊」結成

2000年夏：第1回大地の芸術祭開催

2001年夏：

第2回大地の芸術祭プレイベントとしてジャクリーヌ・マティスによる凧揚げ大会「スカイワーク」を開催

2001年秋：

第2回大地の芸術祭アイデアコンペティション

2002年5月：

第2回大地の芸術祭のプレイベントとして、中川幸夫、大野一雄による「天空散華“花狂”」を開催。100万枚の花びらが信濃川河川敷に降り注いだ。

2002年8月：

越後松之山「里山学会」スタート。自然科学系の専門家を招いて地域資源の活用法を研究する会。「森の学校キョロロ」が主催して3ヶ月に1度のペースで開催。

2003年冬：第2回大地の芸術祭企画発表会

2003年5月：

「農楽塾」スタート。農業の専門家を招いて中山間

地域農業の未来を研究する会。「まつだい農舞台」が主催して不定期開催。

2003年5月・7月：

大地の芸術祭プレイベント講演会。総合ディレクター北川フラムが「地域・世代・ジャンルを超えたネットワーク」の構築について語る。

2003年6月：森の学校「キョロロ」竣工

2003年7月：まつだい「農舞台」、「キナーレ」竣工

2003年夏：第2回大地の芸術祭

2004年夏：「越後妻有夏10days 2004」開催

2004年10月：中越大震災

2004年10月～2005年3月：

「大地の手伝い」と称する震災支援活動に従事

2005年夏：「越後妻有夏10days 2005」開催

2006年冬：

専門知識や人的ネットワークをいかしながら「大地の芸術祭」、「こへび隊」を応援する「おおへび隊」が結成。

2006年春：

新潟市民を中心とした「新潟サポーターズ会議」がスタート

2006年夏：第3回大地の芸術祭開催

2006年秋：越後妻有里山アートツアーを開催

2007年2月：

第4回大地の芸術祭開催が十日町市より公表される。

2007年3月：

「越後妻有次の一手」を語る会。北川フラム、茂木愛一郎、袴田共之、森繁哉を講師として、「越後妻有の展望」が語られる。



イベントの公演 儀明劇場「倉」



過去の大地の芸術祭の作品集

2007年5月：

第4回大地の芸術祭キックオフパーティ、NPOの計画概要の発表。

2007年6月：

「第1回NPO準備会」NPOの理由、設立の目的と目標についての確認。

2007年7月：

「第2回NPO準備会」8月開催の「大地の祭り」に向けた準備、事務局の体制、サポーターのあり方、関係者間の情報共有の方法について検討。

2007年8月：2007年夏 越後妻有 大地の祭り 開催

上記のとおり10年間の活動のなかで、農業をしてきたお年寄りが多く住む地域に、都市部で何をしたいかがわからない若者達が関わることとなり、そこにおこる摩擦、葛藤から、活動を進めていく手法で各集落、地域住民に関わってきた。

当初は個人の土地、スペースをお借りすることは難しく、行政所有の土地を中心に活動してきたが、10年にわたる活動を経て、家の内部という個人の間所を使用させてもらえるようになってきた。このような活動から、空き家プロジェクトという家を使ったアートプロジェクトを進められるに至り、CMOPの活動につながっていった。

3. 助成年度(2年間)の活動内容

1) 事業化の背景と目的

大地の芸術祭を開催してきた越後妻有は、アートによる地域づくりの動きが少しずつ認知されてきたこともあり、使われなくなった空き家を借りてアートの展示場として利用するという動きが出てきた。

しかし、家は人が住み使ってこそ生きる場所であり、

無人の作品展示場を増やしていくことが地域活性化の解決になるわけではなく、この空き家をどう活かしていくかが課題となった。このような経緯の中で、CMOPの展開という考え方と、方向性を定めてきた。

CMOPは、大地の芸術祭において取り組まれてきた空き家・廃校の再生活用を、規模を拡大し、オーナーを募ることで事業化していきたいと考え、

空き家・廃校を美術館・資料館・住空間として再生し、コミュニティの拠点となる場として地域内外に開く

建物に凝縮した地域の文化や知恵を読み解き、継承発展させながら改修する

地域の工務店が改修に関わり、リノベーション技術の習得を通して地場産業の再生をはかる

芸術祭の開催も含めた地域振興の資金源とすることを通して、地域の資源・景観を都市住民の参画によって維持していく

この4点を当初の目的とした。

2) 事業の概要(しくみ等の全体像)と詳細事業の概要

CMOPとは、地域で使われなくなった空き家をアーティストと建築家の協働によってよみがえらせ、地域コミュニティの中心となるような場所にしていくと同時に、この家に対してオーナーを探していく事業である。

この事業は、アートという日常生活で直接的に利用されることのないものを改修と同時に入れ込み、今までになかった新しい空間を作り、その空間を利用して新しい地域のコミュニティを作っていく。また、空き家を移築し活用するのではなく、地域の民家をその場所で活かそうとすることが特徴である。



販売された物件「名ヶ山写真館」

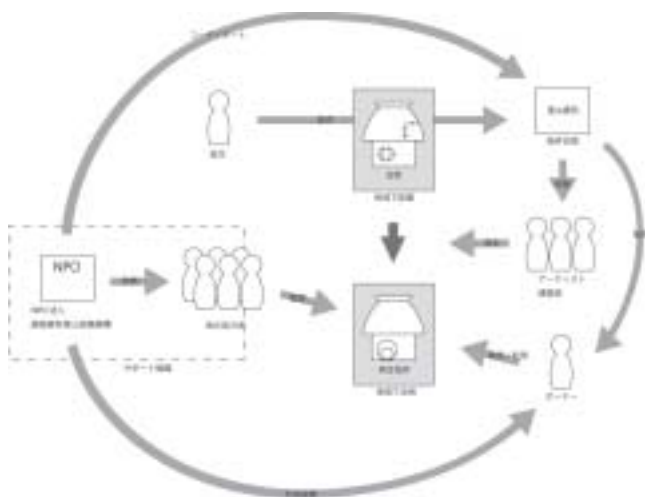


販売された物件「BankART 妻有」

この2年間の活動の中では、地域で使われなくなった空き家を調査・収集するところから始まり、出てきた空き家に対してオーナーを募ってきた。つまり、先に物件に投資をして、その状態でのオーナーさがしを行ってきた。

今後の事業の進め方としては、入手した空き家に対しての情報を公開し、まず家のオーナーを決めていく。その後オーナーの意向により、家はどのような使い方をするのか（住宅（別荘）、店舗、ギャラリー、集会スペースなど）を決定し、それにあわせて、どのようなアートを入れていくか（設備系、空間構成系、といった方向性を決める）、家の改修としてどのようなことを行うか（構造部分の改修、屋根の改修、壁の改修、床の改修、電気設備の改修、水周り設備の改修など）を打ち合わせによって決めていく。家の改修に関しては、これまでのプロジェクトに関わってきた建築家に相談できる体制をとる。

全体像・体制図



改修前「脱皮する家」

事業の詳細（2年間の活動内容）

空き家の収集

2005年から調査を続けてきた空き家は100以上ののぼり、その中で2006年の大地の芸術祭で活用したものが約40。2006年8月の会期後約半数を所有者へ返却し、残ったものは家主から購入したり、長期賃借させてもらっている。

売買するための組織の設立

空き家の販売契約を行うための組織として、宅地建物取引主任者をおく有限会社里山妻有を設立した。販売とあわせて、空き家の建築設計、施工監理などにあたる。

空き家・廃校の改修

首都圏で活躍する建築家3組（5名）が改修業務に携わり、全体で20件程度を手がけた。主なものとしては、地震で人が住まなくなった家を全国で活躍する陶芸家の作品（風呂、かまど、いろり、洗面器など）で再構成し、地域住民主体でレストランを運営する「うぶすなの家」、家の柱、梁を含めたありとあらゆる部分を彫刻刀で彫り斬新な内部空間をつくった「脱皮する家」、世界的アーティストであるクリスティアン・ボルタンスキーの美術館として廃校となった小学校を活用し開館した「最後の教室」、大工棟梁田中文男の蔵書を集めて地域の中心施設としていくことを目的とした地域の旧公民館を改修した「妻有田中文男文庫」、東京の専門学校が関わり地域の写真館として継続的な活動をしている「名ヶ山写真館」、昔の地場産業であった養蚕を復活させるプロジェクトの拠点となっている「繭の家」などがあげられる。進行中のものとして、地域の中心施設であり、統廃合により廃校となった小学校を利用する案として、



改修後「脱皮する家」

地価の安さを逆手にとって作品を預かる倉庫に利用しながら販売につなげていく動きを策定している。事例として全体の数はまだ多くないが、放置され壊される運命にあった空き家を再生させ、活動の拠点としてきたことの意義は大きい。

所有物件販売

販売4件(「名ヶ山写真館」「BankART妻有」「脱皮する家」「うぶすなの家」)、ネーミングライツ4件(「ボルタンスキーミュージアム」「旧上新田公民館」「小出の家」「夢の家」)の販売が成立。

地元の方の管理による作品公開

大地の芸術祭期間中は地域外のサポーターなどの手によって管理されてきた空き家であったが、その後の管理は主として地元集落の住民たちによって主に管理されてきた。少しずつ関わってもらうことで、地元の主体の形成につながってきた。

空き家の維持管理

日常的な管理とともに、冬には雪から家を守るための雪囲い(家の窓や戸に木製の板を取り付けて、ガラスが割れたり雪の力で壊れたりしないように守るための)、積雪時に屋根から雪を下ろす作業などを行ってきた。

顧客の開拓

大地の芸術祭を目的に地域を訪れる美術ファンが見学者の中心であった。しかし、オーナーとなりうる層とは必ずしも直結しないため、顧客層的な把握と、その顧客層に対して情報提供を行うツールを作成することを検討してきた。



「うぶすなの家」でのお茶会

「大地の祭り」における空き家作品の再展示
2007年8月1日～9月2日の期間で、「大地の祭り」というイベントを開催。このイベントにあわせ、空き家を使って展開したアート作品を連日公開した。日常的な管理は集落の住民の方々にお願いし、来訪者への対応を行った。会期中は、住民たちがその施設の魅力や地域の暮らしについて語る姿が見られ、そのおもてなしが地域外からの来訪者に好評であった。

空き家を利用したソフトプログラムの開発
前年度から少しずつ検討してきたプログラムを整理。

「うぶすなの家」でのお茶会

やきもので構成された「うぶすなの家」にはいくつかの茶室・作家の茶器があり、不定期にお茶会を開催。空間を活かした活用の仕方としての一例であり、他のプログラムも含めて進めていく。

「名ヶ山写真館」での遺影撮影

東京総合写真専門学校が関わっているプロジェクトで、作家である倉谷拓朴が滞在中に遺影(ポートレート)を撮影するプログラムを作成。



「名ヶ山写真館」での遺影撮影

「繭の家」での繭人形づくり

「繭の家」では、養蚕に関わる道具などを展示しているが、この繭玉を使って人形を作るワーク



「繭の家」での繭人形づくり

ショップを開催。商品としても可能性があり、体験プログラム・お土産として、位置づけていく予定。

「みどりの部屋」におけるフロッタージュ

葉っぱに紙をかぶせてこすり葉の模様を浮かび上がらせるフロッタージュの技法を用いた作品づくりを、「みどりの部屋」だけでなく、小学校の体験学習としても実施。



「みどりの部屋」におけるフロッタージュ

販売ツールの作成準備

ホームページとパンフレットを作成して、広く一般の層への働きかけを行っていくための準備を行っている。

活動のコーディネートを行う NPO 法人「越後妻有里山協働機構」の設立

空き家の売買だけでは CMOP の活動は完全ではなく、その過程におけるさまざまな人的ネットワークの構築が重要となる。2008 年 7 月に認可予定の NPO 法人「越後妻有里山協働機構」は、空き家の設計・施工・販売を行う有限会社里山妻有と、情報を提供する地域住民や専門家、アーティスト、オーナーをコーディネート



雪囲い作業

する組織として機能していく予定である。地域の情報を吸い上げ、空き家の改修方針の企画立案を行っている。里山妻有は NPO と連携をとって、実務にあたる。

3) 事業量と収支の推移

2006 年

空き家の調査を重点的に行い、100 軒以上の空き家を調査した。その中で、諸条件を整理し、持ち主からの買取を進めてきたものが 10 軒程度である。そのほか、長期賃借物件を含めると、20 軒程度の物件を管理することとなった。初年度は、先行的に空き家に投資した部分も多く、収支としてはマイナスとなった。

2007 年

所有している物件の販売と、新たな物件の情報収集に力を入れてきた。

一部販売が成立したため収支はプラスとなったが、顧客獲得に至っていないものが多く、また恒常的な収入がないため、プロモーションや事業拡大に向けた動きが乏しかった。

4) 事業推進にまつわるエピソード

建物の売却・譲渡に合意が取れても、土地の売買が不可能なケースがあった。新たなオーナーに物件を販売していくことを前提とした事業であるので、このような物件については取得を見送った。長く土地に根ざして生活してきた人々が多く、土地に関しては手放せないというケースが多く見受けられた。

事業の推進に関しては、家は移築、解体再生などをすることなく、その場所で活用していくために、周りの住民との対話が重要となる。そのために、地域住民との話し合いを繰り返し行い、理解を深めていった。



屋根の雪掘り

このような対話を繰り返していったことが後の協力体制の構築にプラスに働いていったということがある。

4. 活動の成果と課題

1) 目的・目標の達成度 自己採点

空き家をアーティストと建築家、地元住民の協働により再生させた事例として、「うぶすなの家」が理想的、代表的な事例として紹介されることが多い。中越大震災以降に空き家となった民家を、陶芸家の作品で再構成した家であり、そこを地元住民が主体となってレストラン運営をしている。その後オーナーがつき、そこでの活動をサポートし、越後妻有を訪れるたびに立ち寄っている。

大地の芸術祭以降の来訪者も多く、地域の中心施設として活動を続けており、この継続性に、地元・オーナーなどの満足度も高くなっている。オーナーがついた空き家が、アートを見せる場として機能し、さらに付加価値を持つ活動へと広がっている例である。

広い越後妻有地域全体を覆いきる活動は大変であるが、今まで手がけてきた空き家の改修や、そこでのプログラムの開発・展開は、地域に少しずつ根付き、地域活性化の側面では成果が見え始めてきた。アートを媒介にしているため、ほかに同じような事例がなく、この地域だからこそ面白いプロジェクトに育っているように思う。

課題としては、活動における成果・情報を伝える力が弱いので、今後はホームページなどを使って、認知度の裾野を広げていくことが必要になる。同時に、大地の芸術祭の来訪者に対して、そのニーズを聞き取り、丁寧にご案内をしていくことがあげられる。

広範囲の地域で展開しているために個々の事例ごとに進捗状況が異なり、またその物件がある地域の活力、

関係性の構築レベルによっても展開力が変わってくるために、全体的な達成度を図るのは難しい。一部のプロジェクトは非常に進行したものもあるが、広報のレベルなどをみると、達成度としては十分ではない。

2) 地域内外への波及効果

地域外に対しての発信としては、大地の芸術祭という大きなイベントの中で展開しているので、パブリシティなどにとりあげられることも多かった。またアート作品として週末限定開館を広報しているので、そこをめぐって見学に来る人が増えてきた。空き家を利用したアート作品を見に来るといった形が、越後妻有を回るスタイルの中心となりつつある。空き家を活用した地域コミュニティ再生の事例として、官公庁、教育機関からの視察も多くなっており、地域づくりのモデルとして注目されている。

また、最近では大学や専門学校のグループがフィールドワークの場所として越後妻有地域を選ぶ例も増えてきており、その中で空き家を利用した活動を希望してくるケースも出てきた。このようなニーズに応えるために空き家を使ったソフトプログラムの開発を行ってきており、参加者へCMOPの周知を図ってきた。一般の方からの空き家の取り扱いに関する問い合わせも数件来ており、少しずつ広がりを見せている。

地域内の状況としては、空き家を使ったプロジェクトがいくつかの集落で取り組まれていること、地域住民の手によって管理運営がされているという状況について、かなり認知が進んできている。そういった先例をもとに、自分の所でも何かできないだろうかという意識を持つ地域が増えてきた。また、事業には直接結びついていないが、圏域内の工務店に住宅の相談をしてきた人の中に、この空き家のプロジェクトをみて興



「うぶすなの家」レストラン



宿泊施設「夢の家」

味をもち、家の作り方の参考にしたいという話をされたという例も報告されている。

3) 事業の継続性

本事業は地域づくりの側面をもつため、取得した空き家を販売して終わりという関わり方ではなく、その後の管理、地域との関係性の構築というところまでを含めた活動にしていくことが重要になる。一つ一つの家に対して長期的な視点を常に持ち、自立した運営を目指すことがプロジェクトを継続していくために重要である。

また、家自体をアート作品として大地の芸術祭で公開する物件もあるため、オーナーに対して使用の制約をお願いすることも出てくる。こういった制約が発生する中でも、オーナーが魅力を感じる「何か」というものを確立していかなければならない。この問題に対し、ギャラリーとしてオーナーから借りて運営している事業に関しては黒字化していくことを目標とし、オーナーに配当していくことが解決策のひとつとして考えられる。また、活動の意義を明確にし、社名や個人名を媒体等で露出し、地域振興への応援・社会貢献をアピールできる「スポンサー」としての魅力付けを行うことことで、付加価値をつけた商品づくりを行うことが考えられる。

このように、地域における関係性の構築と、顧客における商品の魅力付けを図り、事業の継続性を高めていきたい。

4) 事業の採算性

空き家の数は今後も増えていく傾向にあり、状態の程度を含めてよりよい物件を取得することはできる。今後、事業の採算性を確保していくためには、以下の

ことが重要である。

事業モデルの確立

現在、体験プログラムの開発やレストラン、宿泊施設、ギャラリー（アート作品を販売する場）としての活用など、付加価値を与える事業を検討し実験的に行っている。今後、それぞれの事業が自立し、採算性を確保する事業モデルを確立していくことが必要である。

商品力をつける

家自体のポテンシャル・魅力を高めること、活動の意義を明確にすることで、スポンサー・オーナーを獲得していく。

受注制作の手法

事業主体側の過大な事前投資のリスクを回避するために、空き家の入手情報を元に先にオーナーを募り、中身のアート、改修の部分を相談しながら進めていく手法も取り入れる。

5) 事業推進に活用した資源がもたらした効果

本事業は大地の芸術祭での動きと同調しながら進めてきているため、そこに関わってきた多くの地域のネットワークを活用してきた。これは、空き家の情報を収集するときにも効果的に働いた。それぞれの地域に空き家があっても情報として出てこないことが多く、これらの情報は、地域に根ざした人的ネットワーク中から出てくることを実感した。

また、販売にまで至っていない物件がまだいくつもあるが、これらの空き家を交流拠点として利用することを積極的におこなっている。ソフトプログラムの開発・運営がそれに当たるものであり、これによって、



改修前「妻有田中文男文庫」



改修後「妻有田中文男文庫」

来訪者への体験プログラムの充実と、管理している地元の人材の育成へとつながっている。

6) 事業着手後に見えてきた課題と解決方策

顧客のニーズと地域のシーズを的確に把握し、商品づくりと営業・販売していくためには、関係するスタッフのスキルアップが重要で、多様な人の関わりがある中で、個々人が専門家たちから学び、経験をつんでいくことが求められている。

本事業は、空き家の情報収集からアーティストの選定、顧客の獲得、設計、工事管理、地域とのつながりの構築、維持管理など、活動の範囲は多岐にわたり、そこに関わる専門家や地域の協力者が必要で、そのネットワークの構築とコーディネート能力も重要となってくる。

NPO 法人「越後妻有里山協働機構」は、今まで大地の芸術祭に積極的に関わってきた人を中心に構成され、今後の大地の芸術祭をサポートしていこうという組織である。この NPO が今後の CMOP の活動を主導してく予定であり、越後妻有地域の会員の方には地元の情報収集を、地域外会員の方には専門的な関わり、新たなネットワークの構築、顧客の獲得などの人的なサポートをしていく予定である。

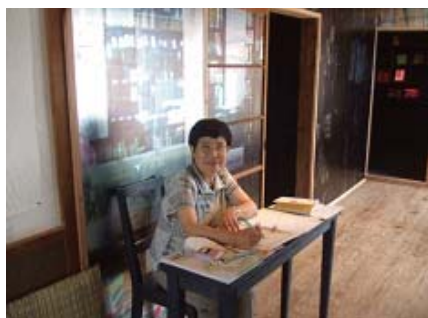
5 . 今後の展開

1) 団体や事業の理想的な方向性

継続した活動を展開していくためには、以下の体制強化が重要になる。

多様な主体の形成 財源の確保とリスクシェア

事業を自立させ継続していくためには、アートフロントギャラリー主導から地元主導へ、また特定企業と行政からだけではない財源の確保に向けて、リス



地元住民に管理されている物件

クシェアできる多様な主体を形成していく必要がある。これが空き家や作品のオーナー制度、スポンサー制度であり、前述した NPO 法人「越後妻有里山協働機構」の役割となっていくことが望まれている。

特色あるコンテンツ

3年に1度の大地の芸術祭以外の年や、夏以外のシーズン特に冬に特色あるコンテンツを開発し、集客の通年化を図っていく。「晴耕雨読」ならぬ「夏耕冬読」をコンセプトに、里山の春夏秋冬の魅力、暮らしを伝えるプログラムを検討していく。

2) 事業化の意義

日本の地方の状況はどこも厳しく、越後妻有地域も例外ではない。高齢化が進み、限界集落と言われる集落が全体の20%以上を占める。CMOPはこのような地域に新しい再生のモデルを構築するために活動してくプロジェクトであり、事業化することで継続的な活動を目指すということは、意義あることと考える。

一年の約半分を豪雪の中で過ごし、各集落の中で助け合って生活してきた特殊な文化であり、文化のストックとしての家を残していく活動は重要である。

CMOPは空き家の再利用という動きの中に、アートという要素を入れ込んで再構成していくという新しい試みである。アートというのは手のかかる赤ん坊のようなもので、そこに関わる人たちが手をかけていかないと成立しない。これは、地域づくりの活動と同じことである。そこに住んでいる人たち、来訪者、さまざまな関係者が少しずつ手をかけていくことで成長していくものである。

大地の芸術祭というアートを使った地域づくりの中から生まれてきた CMOP という一つの活動に、事業化



「脱皮する家」

の兆しが見えてきた。これが事業化していくことは、地域づくりという客観的評価指標がない分野において、成果を図る指標を作ることができる。また、この取り組みが事業化することは、日本の中山間地の展望をつくることになると考えられる。



「最後の教室」



「旧上新田公民館」



「小出の家」